

令和5年度 在宅療養児支援連携研修報告

日時:令和5年8月26日(土)14:00~16:00

会場:佛大二条キャンパス N1-207教室

一部 「小児在宅療養児の現状と課題」
～子どもと家族の成長を感じられる在宅医療を目指して～
医療法人おおまえハローキッズクリニック 大前 禎毅 先生

二部 「小児訪問看護」～医療ケア児と通学支援～
訪問看護ステーション オルテンシア 中村 智香 先生



大前 禎毅 先生



中村 智香 先生



開会の挨拶：訪問看護ステーションさいきょう 新井 妙子 氏



本日はお忙しい中、御参加下さりありがとうございます。日頃より京都府訪問看護ステーション協議会の活動へのご理解ご協力ありがとうございます。この研修の目的は地域で増やそう訪問看護師というものです。

本日は右京区の西京極で小児科の一般診療、乳幼児健診、小児在宅医療まで幅広くご活躍されているおおまえハローキッズの大前先生と南区の訪問看護ステーションオルテンシアで小児の訪問看護をされている中村先生のお話を通して地域で小児の訪問看護をする人が増え、興味を持っていただけたらと思っております。

一部「小児在宅療養児の現状と課題」

～子どもと家族の成長を感じられる在宅医療を目指して～

医療法人おおまえハローキッズクリニック 大前 禎毅 先生

大前先生は大学病院や第二日赤の小児科のご経験を経て令和3年の1月に西京極におおまえハローキッズクリニックを開院されました。折しもコロナ禍2年目の混乱の中でコロナ罹患児の診察もされ、令和4年度には年間1,700人の診察をされ毎晩11時ごろまで診察が終わらないという過酷な状況の中でも小児在宅医療にも積極的に取り組まれています。

小児と成人医療の違いとして高度医療機器に依存する割合が多い事、成長と共に必要な医療や就学を含めた環境の変化への対応が必要である事、看取りの場の多くが主たる医療機関である病院である事の3つを上げられ、小児在宅医療を取り巻く現状と課題を教えてください、その中で訪問看護が果たす役割をお示し下さいました。

在宅医療機器や治療法は日々加速度的に進化して在宅療養が可能な状況になる子どもたちが増える中、病院で送り出す側の生活目線での指導が追いついていない現状を事例を通して教えてくださいました。まず、退院したてのご家族にしばしばみられる「医療は専門家がするもの」「病院で看護師さんがしていたように数値を細かく記録しないといけない」などの思い込みから対象児や両親・兄の兄弟の生活が破綻の危機に追い込まれる状況から、在宅医療は①継続可能で②少しくらい抜けても大丈夫な＝安全な③特殊ではない（複雑じゃない）キュアとケアの提案をして上手に生活の中で家族が実施できる手技やスケジュールを提案し家族の生活の安定を図ることが必要であると教えてくださいました。その中で紹介された泣く赤ちゃんに「どうして泣くの？SpO2が下がるでしょ？」と声掛けしてしまうお母さんの言葉は深く考えさせられました。

ご家族が医療的ケア児と共に成長し、漸くお家で安定して過ごすようになった子どもたちの次の試練は就学問題です。2006年からのインクルーシブ教育の推進により年々医療的ケア児の学校への通学数は増加してきていますが、この20年ほどの草創期に現場は個々の事例の特殊性や学校側の受け入れ態勢、対する家族の意向の調整が取れず混乱し様々な問題が発生していました。そこで大前先生は月に1度「主治医訪問」として学校に通い、家族と学校の共通言語を模索し一人一人を丁寧に診察してそれぞれの落としどころを見つけ出す、という活動を続けて来られました。子どもの成長と共にまず親が、次に学校が、社会が成長していくことの重要性を教えてくださいました。私たち医療者・訪問看護師は、いの一番に、時には成長を見越して先んじて成長しなければならないのだと思いました。

大前先生が「日々の看護から疑問点・問題点を洗い出し、看護師目線での解決案を在宅医と協議し在宅医を通して病院や学校にフィードバックさせる」という事を訪問看護に期待されていると仰って下さりその為には何がその子にとって問題になるのかをしっかりと見据えることができるようにならないといけないと思いました。また、一緒に協議して下さって学校や病院に表立って対応して下さる大前先生の存在の大きさや安心感に小児訪問看護へのハードルが下がっていくのを実感しました。

スライドで見ていただいたクリニックの待合室は陽光が優しくあふれる広い空間に子どもたちの大好きな遊具が配置されていて来院する親子の緊張や不安を和らげてくれる素敵な様子で大前先生の優しい安心感そのものに感じました。



二部 「小児訪問看護」～医療ケア児と通学支援～

訪問看護ステーション オルテンシア 中村 智香 先生

中村先生は4人兄弟の中で育たれ、現在は0歳から中学生の5人のママとして「とにかく子どもが大好きなんです」と仰る明るい笑顔と優しいお声がとても印象的な方です。2022年に南区に訪問看護ステーション オルテンシアを開設され小児訪問看護や通学支援に積極的に取り組まれています。

中村先生からは多くの事例をご紹介いただき実際の小児訪問看護の様子を詳しく教えて頂きました。小児訪問看護というと複雑な最新の医療機器を使いこなせないといけないという不安が私のような50代の看護師には付きまとうのですがその点についても業者さんと連携されステーション内で勉強会を持つことや機器自体に業者の連絡先が記載されているのでそれで不安なく対応できると教えてくださいました。

子どもの心身の成長に合わせて家族と協議をしてケアの継続の為にケアの引き算や方法の変更について看護師目線で問題解決を図る様子もご紹介されていましたが常に子どもを中心にご家族に優しく寄り添い力強く支えるご様子が伺えました。退院前カンファレンスのチャンスを利用して病院内での実際のケアの様子を見学させて欲しいとお願いされたり、在宅における急変時のマニュアルを作成する中で家族にCPRを指導されるなど、どこまでもその子の為に全力を尽くされる様子が素敵でした。

通学支援の実際の様子も複数の事例を紹介してくださいました。通学支援はまだ制度が始まったばかりで、吸引時の駐車場所の確保や登校後、看護師がステーションに戻る交通手段など様々な問題がありますが、実際に通学されている利用児が学校で多くの人の笑顔に囲まれている写真には制度の意義や必要性を痛感しました。

質疑応答のコーナーでは実際に小児訪問看護や通学支援をされている事業所からレスパイト先の情報交換や放課後デイサービスの情報交換がなされ、中村先生からも「みんなで情報共有して交流会したいです。」とお言葉を頂きました。



閉会の挨拶：訪問看護ステーション 虹 西尾 希美重 氏



横浜から京都に来て15年になりますが来た当時横浜では多かった小児訪問看護が京都は本当に少なく驚きました。最近は小児訪問看護も増えてきましたが、看看連携はとても大切だなんて今日は本当に実感しました。また、このような交流会を持ちたいと思います。皆様、ありがとうございました。

感想

今年度も例年に引き続き京都府訪問看護ステーション協議会の基本方針の一つとして小児訪問看護の普及が挙げられています。しかしながら実態調査に於いて受け入れ態勢を整えている事業所は約1/3以下と厳しい状況です。今回の研修でチームのリーダーとして力強く指導・牽引して下さる先生の存在や、実際に小児訪問看護をされているステーションさんのご様子に触れることができそのやりがいや社会的意義を深く学ばせていただきました。今回の報告では割愛させていただいておりますが大前先生は被虐待児の家族を含めた訪問活動もされており、中村先生は子ども食堂の運営も行っておられ、子供を取り巻く様々な問題に日々継続して尽力されています。私たち医療従事者として、また社会の一員として未来をつくる子どもの為に成長しなければならない時が来ていると痛感しました。